

第1日目 2025年9月6日(土)

午前の部 10:00~12:40

テーマセッション(1)

家族実践論の再考——現代家族をとらえる新たな視座として

オーガナイザー

三品拓人(筑波大学)

司会

岡田玖美子(奈良女子大学)

討論者

戸江哲理(神戸女学院大学)

松木洋人(早稲田大学)

【企画趣旨】

本テーマセッションは、家族社会学領域における家族実践論(あるいは共通の枠組み)の位置づけや意義・可能性を検討することを目的とする。家族実践(family practices)とは、イギリスの家族社会学者D.モーガンによって案出された概念である。本テーマセッションでは、J.フィンチによる家族呈示(displaying families)も含めてひろく「家族実践論」として分析に用いる。

家族実践論の視座においては、家族成員は日々の家族生活に関わる活動を行う「社会的行為者」であり、家族は日常生活において無数に存在する行為によって成立あるいは維持されていると捉えられる。例えば、「家族」であることを理由に行為すると同時に行為をすることによって当事者の間に「家族」としての感覚が継続する、という見方をする。家族として振る舞うから、家族として見られると言い換えることもできるだろう。

家族成員が何らかの家族実践を行っていること自体は自明としても、あえてその行為に着眼して「実践」というレンズから検討することの意味、そこから産出される知見が持つインプリケーションはどのようなものだろうか。本テーマセッションでは、子育てや介護の経験者によるケアと虐待の境界(第1報告)、葬送・先祖祭祀における「嫁」(第2報告)、中年期のLATからみるパートナーシップ(第3報告)、トランスジェンダーの子をもつ親が、子を「受け容れる」こと(第4報告)といった様々な事例に対して、家族実践論の視座から検討する。

現代社会においては、家族形態やその営み、家族の自己定義自体も多様である中で、その複数の細々とした日常的な家族の営みを「実践」という動態的な社会学的な認識方法を用いて記述することは、その選択性や複雑性、流動性、多様性などを捨象せずに記述できるという点で家族社会学に貢献できるのではないだろうか。本テーマセッションでは、2人の討論者からのコメント、フロアからの参加を通して、家族実践論の可能性について議論を行うとともに、家族社会学という学問が有する意義や重要性についても再確認したい。